

SSSV プログラムに参加して

口腔生命福祉学科3年 金子 絵里奈

2011年8月9日～18日の10日間、日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度「ショートステイ・ショートビジット（SSSV）プログラム」でインドネシアのジョグジャカルタにある、ガジャマダ大学に派遣されました。ジョグジャカルタはインドネシアの首都ジャカルタから飛行機で1時間ほどのところにあります。ジャワ島の古の都と言われていて、ボロブドゥールやプランバナンといった世界文化遺産を有する、インドネシアを代表する観光地です。そんなジョグジャカルタにあるガジャマダ大学はインドネシアの最古で最大の大学として知られています。

インドネシアは国民の約87%がイスラム教です。1日5回のお祈りのほか、起床時間、食事、服装など生活の全てが宗教と密接に関わっていました。私たちが訪問した8月は、ちょうどイスラム暦の第9月、ラマダーン（断食）の期間で、4時から18時まで一切の飲食が禁じられていました。宗教にほとんど執着がない私にとって、彼らの生活はすごく新鮮でした。また宗教は医療とも深く結びついていて、イスラム教信者は病院に行

かないことが多く、このことが現在のインドネシアの医療問題にもなっているそうです。

私は今回の滞在で、SCS-CEL Program (Students Community Services-Community Empowerment Learning Program) に1泊2日の日程で参加しました。ガジャマダ大学が創始したこのプログラムは、様々な学部から10名ほどの学生がインドネシア全域のvillageに2ヶ月間派遣され、そのvillageで住民と触れ合いながら共同生活をするというものでした。そこで生活をしながらその土地に潜在している問題を見つけ出し、それぞれの学部で学んだ理論を応用して解決方法を導き出し、活動します。活動計画を作成する際には、地方自治体や大学の社会学部、民間企業と連絡を取り合い、民間企業には資金提供もお願いするそうです。

歯学部生が行っている活動としては、小学校や中学校に出向いてう蝕予防について講義をしたり歯磨き指導を行ったりする「歯科健康教育」、villageの身体測定に出向き、血圧測定を行う「医学・歯学サービス」、その他「う蝕のスクリーニン



小児の体重測定 天井からぶら下げている布に子どもを乗せて測定します。



成人の血圧測定を手伝わせてもらいました。

グ検査」などがあります。

今回、私は身体測定に同行しました。villageでは住民が住民のために運営する、定期的な身体測定が行われます。しかしそこには医師や看護師などの医療専門職員はいません。会場は、village内の一軒の民家で、夕方の4時から開始されました。成人は、血圧と身長・体重の測定を行い、歯学部学生はそこで血圧測定をします。villageには、日常的な健康管理のためにガジャマダ大学から血圧計と聴診器が寄付されていました。普段の身体測定は歯学部学生もいないため、住民相互で血圧を測っているそうです。小児は身長・体重の測定とはしか予防薬の服用を行います。体重測定は写真のように、天井からぶら下げている布に子どもを乗せて測定します。ちなみに、成人の体重測定は体重計で行っていました。はしか予防では、大豆くらいの大きさの真っ赤な薬を「あめ玉だよ」と子どもに言い聞かせながら服用させます。逃げ回ったり泣きじゃくったりする子どもがほとんどで、口の中に入れてもすぐに出してしまっていました。

10日間インドネシアで過ごしている中で、自分の狭い世界観を実感しました。日本の歴史や文化といった自国に関する知識がいかに不足しているのか、これまで大学で学んだ知識をいかに活かしていないのか、気づかされました。普段の日本の生活が「標準」と当然のように考えていたので、何かを意識して過ごすこともなく、またそれについて何か感じることもありませんでした。インドネシアという異文化で生活をする中でこれらのこ

とに気づけたのが、一番大きな収穫かもしれません。また、文化も生活習慣も教育も、日本とは全く違う世界を体験して、日本という国、そして日本での日常生活を違う角度から見るができるようになり、自分の中に視点が一つ増えたような気がします。何をすることも問題意識を持って取り組むことが、今の自分にとって大切だと考えるようになりました。そして、もっと日本を知ろう、学んだ知識を使える知識にしようという意欲が芽生えました。

10日間、現地の多くの方々にお世話になり、友達もたくさんできました。日本とは全く違う環境、文化の中で元気に過ごせたのは、全て現地でお世話になった方々のおかげだと思っています。食べ物は全ておいしく、毎回の食事が楽しみでした。友達に教えてもらいながら、スプーンやフォークを使わず、素手で食べることに挑戦しました。もちろん楽しいことばかりではなく辛いこともありましたが、全てが良い経験、良い思い出です。もちろん会話は全て英語で、伝えたいことを伝えられずに悔しい思いをしたことがたくさんあります。これからもっと英語を勉強して、歯科の専門的な知識や技術を貯えて、いつか必ず再びガジャマダ大学を訪れたいと思います。

2011年12月10日～11日には、インドネシアのパリクパパンで行われた「International Symposium on Oral Health Education and Research」に参加し、SSSVプログラムで学んだことについて発表させていただきました。初めて参加するシンポジウムで初めて英語で



ガジャマダ大学の研究室で



International Symposium on Oral Health Education and Research

プレゼン……本当に自分にできるのか不安いっぱいでした。スライド作成には魚島先生からアドバイスをいただいたほか、SSSVに参加した学生のみなさんにもご協力をいただきました。英語への翻訳と発音のチェックはロクサーナ先生にお世話になり、出発の2日前には小野先生から予演会を開いていただき、前田先生からも出席していただきました。また、日々の臨床実習や授業など忙しい中でも頑張ることができたのは、クラスの友達が応援し、支えてくれたおかげだと思っています。多くの方々を支えをいただけたことに、本当に本当に感謝しています。

最終的なスライドが完成したのは出発の前日で、現地に向かう飛行機の中でひたすら原稿を読み、英語の練習をして本番に挑みました。本番で

は脚が震えるほど緊張しましたが、いざ発表を始めると楽しくなり、終わってしまうのが寂しいと感じるほどでした。海外の大勢の前で発表できたこと、そして何より発表を楽しむことができたことが、私の自信となりました。また会場では、SSSVで仲良くなったガジヤマダ大学の親友に再会することもでき、本当に良い思い出です。学部生の私にとって2日間のシンポジウムは、このような世界もあるのか、と将来の新しい道を発見できた場でもありました。世界を活動の場とする歯科衛生士、社会福祉士になりたいという想いが芽生えた2日間でした。

最後に、今回このような貴重な機会を与えてくださった方々、このプログラムに関わる全ての方々に心から感謝申し上げます。

